



いなほ

第114号

2021年7月20日

NPO 法人 萌

代表 渡多江文哉

横浜市戸塚区深谷町 893-2

B型事業所 工房いなほ

相談支援事業所 ふかや

グループホーム 独歩

TEL 045-443-7416

URL <http://www.mo-e.jp>

「自分で決めるということ」

私達は様々な場面で、自分で決めていく事が求められる。決めていく事は日常生活上の選択から、人生にとっての重要な意味を持つ転機の場面もある。転機は進学や就職等のライフステージの移行段階での出来事として捉えられたが、結婚や本人の病気等、その人にとって独自の出来事としても捉えられる。転機と言われる出来事は従来からの自分の役割、人間関係や日常生活等を変化することが求められる。自分で決めるという気がなく思われる場面を省みる時、目に付くことがある。それは自分で決めていけない事である。

実際に、「フォークリフトは取るかは親に聞いてみないと」「親が一人暮らしを駄目と言っている」と言った言葉が利用者から聞こえて来る。それぞれの利用者の今後を左右されると思われる局面や今後の人生にとって経験となるだろうという機会を事前に本人に示し、最後に利用者自身が決めていくという場面で聞かれる言葉である。

確かに、歴史的に見れば社会への参加や選択の場面が狭められていた。しかし、その様な状況であっても「生活保護を受けなくて生活したい」と希望する人や一人暮らしやグループホームの入居は「親に聞いてみないと」という人もいる。そもそも一人暮らしを念頭に置いていないような人もいる。この相違はどこから生じるのだろうか。自分への自信もその一つではあるが、自分が決める環境と決めて来たという経験の有無が生んでいるように思われる。

決める決断は自らの人生を切り拓く事が無いと出てこない。自分で決めるのが難しかったとしても、自分で決めていく状況が無くなる訳ではない。決められないのは単なる決めていかなければいけない事を先延ばしにただけに過ぎない。何も利用者だけに見受けられる訳でもない。転機と言われる出来事は誰にでも起こりえるからである。

転機のような場面で問われるのは自分自身の在り方であるように思われる。自分で決めていくのには経験が大事な要素となるだろう。決めていく経験と経験する機会を増やして行くのかも大事でかもしれないが、決める決断が出来るかどうかは本人に係っている。その決断が出来るかどうかは今後を左右するのだと思われる。

萌日記 2021.6.21~7.20

・萌の理事が経営する「北の漁場」。タマネギ、じゃがいもをお買い上げいただきました。ありがとうございました（6/28）。

・先月簡単に報告しましたが、利用者の一人が近隣の会社に就職しました（7/2～）。いなほは円満退所。ご本人、休みの日には時々いなほの様子を見に来ます。

・非鉄金属のプレハブのレイアウトを変更しました（7/3）。手押しの製材機や鉄板テーブルを搬入するなど、プレハブの左半分をパレット入門編的な位置づけの人が使えるようにしました。

・施設外就労でもお世話になっている会社に、7月から職員が仕事の仕方を学ぶ研修に行っています。職員が一般企業で研修することによって、多くを学びそれをいなほでの仕事に生かせるようになるためです。外部研修です。

・相談支援事業所ふかや。計画相談をある事業所から何人かまとめて受任するなど、精力的に動いています。

・あるイベントでの野菜販売の予定がありましたが、残念ながら参加を見送りました（7/17）。畑でとれた有機無農薬野菜は「ふかや」のある戸塚駅近くの事務所前で継続的に販売しています。また、戸塚区役所内で売る話が内定しています。

・みなとみらい清掃は7月からの3ヶ月間、毎週月曜日に駅前広場などを清掃しています。新メンバーも加わりました。（岡）



グループホーム独歩・手作り餃子パーティ

*非鉄プレハブのレイアウトを変更しました。



パレット作業で使う鉄板を設置



製材作業も可能に



家電などの分解スペースも合理的に再配置

ヴィゴツキー「思考と言語」(新読書社)

喃語から一文語、二文語と進んで行くこどもの言葉は、モノに名前があることを知ると語彙が増えていく。モノを見ると「トラック」「ネコ」というようになる。そして犬のしっぽを見ただけで「イヌ」というようになる。対象の一部を見て分かることは、頭の中に全体像が描かれて、全体と部分ができ上がっているのだろう。ここまでくると言葉は、モノがなくても言葉を使いこなすことができるようになる。自動車がなくても小箱を使って自動車の真似して遊ぶことができる。言葉は対象がなくても、頭に描いたイメージで言葉を使いこなす。象徴機能としての言語である。言語の記号化は思考を生み出すことになり、そして思考は言語で表現することになる。



言葉が成立する以前からこどもは、モノを五感でとらえて表象(イメージ化)していることは知られている。思考と言語は別々の発達を経て、2歳くらいに交差することになる。その引き金となるのがモノの名前であるといわれている。思考は言語で表現することになる。なんでも「アーアー」と表現していた言葉から話し言葉が生まれる。大人の会話に影響を受けて、話し言葉は増えていくが、思考は具体的な体験や出来事に依っているのだから、言葉の定義や意味は理解できない。

単語や言葉の使い方は生活の中で自然と身についていくが、次の段階となる書き言葉となると戸惑う。いままで身振り、声(音としての言葉)を補助として話し言葉を使っていたが、書き言葉になると、身振りも声も使うことはできず、頭の中で、単語の定義や意味の違いを意識的に理解して文章を作らなくてはならない。話し言葉から書き言葉へとスムーズに移行することはできない。その橋渡しとして内言が生まれる。内言とは自分に向かった対話である。最初は独り言のように喋るが、いつしか喋らなくなり頭の中で考える、黙考である。内言は大人になっても続く。

ヴィゴツキーは1920年～1930年代に活躍したロシアの児童心理学者である。若干37歳で亡くなった。活動期間は10年足らずであったが、ピアジェと並ぶほどの児童心理学の功績をあげた。

トマトはナス科の一年果菜で南アメリカ原産である。トマトの定義である。農家にとっては商品であり、子供にとっては嫌いな野菜である。これらは意味で、文脈によって意味は違ってくる。生活は経験と習慣に依拠しているのだから、話し言葉は具体的な経験と意味の組み合わせから生まれる。

嫌いなトマトを文章にするには、頭の中で、「嫌い」と述語だけの内言であるが、嫌いな理由を考えなくてはならない。「トマトは甘くないので嫌いだ」となる。「ので」の接続詞は話し言葉ではない。

書き言葉は、「ので」「だから」「なぜならば」などの論理的操作が必要となる。ヴィゴツキーは、論理的操作は話し言葉からは生まれなく、教育が必要と述べ、話し言葉から書き言葉への橋渡しとして内言の重要性を指摘している。内言は思考を論理語に置換する工場でもある。(は)



投稿 いなほの所長との出会いから始まった

私といなほの話・・・Y・T

いなほに来て今年で3年目になりました。月日が経つのがとても早く感じます。今、自分の事を見つめ直す為に振り返ってみようと思っています。私がいなほに来たきっかけは身寄りがなかったため、半年程居候させてもらっていた場所から出て、自分の家を借りて自分の力で生活を送りたいという気持ちから、通っているメンタルクリニックのワーカーに所長さんを紹介してもらい、いなほまで見学に行きました。当初いなほという場所もいなほに通う人達の事も良く分かりませんでした。いなほに興味も関心もわいてきませんでした。

ただ新しい生活を送る為にはいなほに通いながら生活保護を受けなくてはなりません。生活保護という肩身の狭い生活にかなりの抵抗がありました。でも生活する為には、妥協して受け入れなければなりません。

いなほに通う新しい生活を送り始めたのにどこか馴染めず元の藤沢の家に行っていました。今思うと生活保護の申請をしてくれた所長さんの気持ちを裏切っていました。そんな自分の行動に凄く後悔しています。アパートに半年くらい住んでいた頃突然引っ越さなくてはならなくなりました。これを機にいなほと関係をきりたい一心で反抗しました。でも現実を考えるとそれは出来ませんでした。新しい物件はもうあってそのアパートはとても住みやすい環境に変わりましたが、変わらなかった事は向かい側にいなほのグループホームがあって、そこに住む利用者から見られているような気がしていました。そんな環境に我慢する日々でした。

いなほに来た当初、私は周りの利用者の人達と関わる事が出来ませんでした。大きな音やまだ知らなかった利用者の人に強い恐怖心しか私にはありませんでした。配慮もあり、2階で非鉄金属の作業を一人でやらせてもらっていました。あの頃は作業をするというより、毎日いなほに通う事に意味があるのだと思い通っていました。

音が怖かった私は職員や所長さんが持って来てくれたCDを毎日聴きながら作業をしていました。当初私のタイムカードは所長さんが作ってくれたスケジュール帳にシールで来た日、来なかった日に可愛いシールを貼っていました。そのスケジュール帳はもう残ってはいませんが、私にとって忘れられない思い出として残っています。

所長さんはそれ以外にも、色々な事をしてくれました。私の誕生日を唯一覚えてくれていて毎年のように誕生日カードとプレゼントをくれました。不規則な生活をしていた私に食べる事が仕事だと言い私の好きそうな可愛いお弁当箱を用意してくれて毎日のお弁当を作ってくれました。

どんな事を思ってプレゼントを選んでくれたのか、朝早くからどんな気持ちで、どんなことを思ってお弁当を作ってくれたのかと思うと、その光景が浮かんできます。誕生日プレゼン

トも手作りのお弁当も、亡くなった母からはなかった事だったので、私にとって言葉にならない想いがありました。そんな所長さんの事を亡くなった母とどこか重ねて見ていました。母にしてもらいたかった事を所長さんはしてくれていたように感じていました。嬉しさはありましたがそれでもまだ私は心が開く事はありませんでした。

ですが、時間と共に当初の頃の様な恐怖心はなくなりましたが、その分人と関わった事で不信感を抱いてしまった人、そうではなかった人達もいました。3年前とは違い、私が悪い意味で心を開いてしまい、人との交流に慣れてしまったというのが事実です。中身の無い空っぽな3年だったのだと思います。

でも救われた事がありました。こんな私の事を見捨てずに信じてくれ、どんな過去があっても受け入れてくれた人がいてくれたという事でした。もし、そんな人が誰もいなかったとしたら、今頃心を閉ざしていたと思います。そんな人達の事を裏切ってはいけないと思っています。

今回、これを機に自分を振り返ってみて実感した事は、これからは良い意味で変わっていかねばならないという事です。私が改めなければならぬ事は、自分でどうするべきか考えて決めるという事です。今まで自分で決断するという事もなく考える事もなかった私にとって、結構難しい課題となっています。今は夢や目標は無いのですが、この先何か見つけられたらと思っています。生きているならずっと誰かの役に立ちたいと思っていました。感謝される程嬉しい事はないです。そんな思いを少しでもいなほで実現出来たらなと思っています。

今になってやっといなほという場所がどういう所なのか分かってきました。今までいなほに対して悪い印象を抱いていた事をととても申し訳なく思っています。職員の姿も利用者との接し方もいなほに対する思いも今まで全く知らない世界でした。

今までパレットを打つだけがパレットの仕事ではない事は分かっていたことでしたが、苦手な図面や考えても解決方法を見つけない自分に悔しくてたまりません。苦手な事を克服したいです。

所長さんが申請の手続きをしてくれた生活保護も、3年の月日を経てもうじき抜けようとしています。2階で作業している頃、母の形見である自動車の事で、生活保護のワーカーさんとやり取りをしていました。生活保護を受給していると自動車を持つことも運転することも認めてもらえないのですが、私は手放す事が出来ず所長さんがワーカーさんにパニック障害があり公共機関を使えないので車の所持を認めてくれるように話してくれたけれど、それがかなわず2階で何時間か大泣きしていましたが、そうだと分かっている、ただの私のわがままでした。自分が納得出来るまで、悔いを残す事なく、形見の車も仕事で運転させてもらっている自動車も出来る事なら、動かなくなるまで乗り続けたいのですがそれは難しい事なので、私なりに大事に乗っていかようと思っています。

自分を失う事なく、真っ直ぐ前を向いて歩いていけたらと思っています。

身近な福祉の話

・ ・ 作る地域とは ・ ・ ・

先週暑い日の中、戸塚事務所の前で野菜を売っていた。日差しは強かったが、それ以上に売っている二人の職員に気がないのは明らかだった。そういう表情で売っていたら誰も買わない、売る気がないなら辞めたほうがよいのではないかと持ちかけた。「ヤル気あります」とは言ったが、やはり、さえない表情で売っていた。暑さもあるが、心がよそにあったのではないか？

暑い中、大工さんは仕事をしている、他にも炎天下で働いている仕事の人はいくらいる。その人を捕まえて、こんな環境で働かせてひどい企業だという人はいるだろうか？

戸塚の事務所前を通った、おそらく近所の方だろう。年配の女性が「こんな暑い中、障害者を外で働かせて、熱中症になるじゃない、こんな暑いところにおかれたジャム誰が買うか！警察呼ぶぞ、また、来た時売っていたら許さない、警察に訴える、あんたたちはどういう団体だ」と大声でまくしたてた。売っていたのは職員だったが、事務所内にいた私たちは何も言わずに農作物を中に入れた。何より残念なのは、売っていた職員が、自分たちはどうしてここで売っているのかを大きい声で説明することができなかったことだ。この年配の女性は、私たちの団体がどういう団体かを知らない。障害者云々と看板にあるから、障害者関係の団体とは思っていたようだ。暑い外に障害者を売らせていた・・・という解釈だと思う。障害者という存在・そこで活動している私たちの目的・そういうことが、まだまだ地域に知られていないことを意味している出来事だった。まだ、オープンして半年。地域の中に私たちが溶け込んでいくには、まだまだ、時間がかかる。いなほのパンフレットや広報誌を近隣に配布する試みを始めた。

障害者のグループホームができる時に、地域で反対運動が起きる話は聞いていたが、やはり、そういうこともあるのだと身に染みる出来事だった。

理解ある地域は作っていくものなのだ。その地道な活動を抜きに、地域の中にといい事にはならないのだ。経営理念には「人は社会の中に」という一文があるが、それは自然にあるのではなく、自らが戦い築くものだと改めて認識し直したできごとだった。

「障害者」という言葉が独り歩きし、その人たちとの生身の交流が無ければ、分かり合えない現実がある。

(波多江久美子記)



最近の活動風景より



戸塚事務所前の野菜販売。今後も地道に



大正地区センター食品配布会の準備ボランティア



夕闇迫る中、枠台製作の作業



新装開店？水道メーター作業場



定められた寸法を治具棒でとる



厳しいパレット作業休憩中に差し入れのスイカをいただきました

支援を考える*****

3年勤めたから、6年いるから、10年勤務しているから、と言ってもその間、利用者と共に働き共に楽しみ、共に悩むという姿勢が支援者になら、何年勤務したかはあまり関係ない。共に何かをしていくという事が、信頼関係の基礎にある。信頼関係が出来ていないで、注意したり、怒ったりすると、その職員は怖いから一緒に仕事はしたくないということになる。また、信頼とは、その人の悩みや問題についてきちんとした解決策をこちらが提示していくことで、確かなものになると思う。利用者の訴えをまっすぐ受け止めていかななくてはいけないと思う。

怒るときや声を荒げたくなる時、本当に利用者はそれほど悪いことをしていたのか？怒るといのは、以外とこちらがイライラしていることがあったり、忙しすぎて余裕がない時に、ついつい怒るといことははないのか？

私は子育てで忙しい時に、子供に怒ってしまうのは、子供がそれほど悪さをしていたのではなく、ただ、自分の気持ちに余裕がなかったりするときに怒っていると気が着くときがあった。

怒るときや、注意するときに絶対やめてほしいことは、相手の存在を否定する言葉である。

お詫び

事務所の隅に小さな段ボールが置いてあり、本日その中身を見たら、投函前の通信6月号だった。そのため、6月号と7月号を一緒に送ることになりました。すみません・・・



編集後記

梅雨が明けて暑い日々が続いています。工房いなほは利用者数が減っていて、全体に寂しい感じがします。どいうルートで、事業所を利用希望している方と出会うのかが分からなくなっているところがあります。どこにパンフレットを置きに行けばよいのかが見えてきません。相談支援事業所も指定一般をとる、地域移行や地域定着支援をやろうとしています。肝心の希望する人との出会いがありません。精神科病院にはパンフレットを置きには伺っています。なんだか、全体がどんよりしている日々のような気がします。

オリンピックも始まれば、テレビはそのニュースばかり流し、本当の社会にある問題から目をそらせようとしているのではないかと勘ぐってしまいます。オリンピックにまつわる利権をあれだけ問題視していた番組が、始まれば手を翻して、金だ銀だと騒いでいる…気の重さはここから来るのかな？

(所長)